日本経済新聞
1月23日
火曜日

試される司法 ④

第5部 あなたが裁く

裁判員への意欲 育てる

社会参加つなげる好機に

「裁判員と検察審査員と、どこが違うんですか？ 同額でいいでしょ」。昨年末の二〇〇七年度予算折衝。裁判員に支払う日当額を巡り、財務省主計局の担当者は最高裁側に問いかけた。

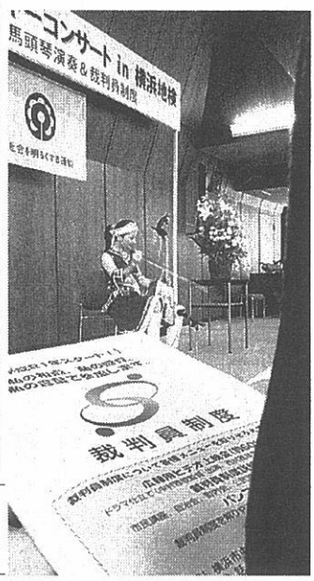
年118回の説明会

裁判員と同様にくじ引きで選び、検察官の不起訴処分の是非を話し合う検察審査員の日当は八千円。検察審査員より少しでも多い日当で、国民をひき付けたい最高裁に対し、財務省は「裁判員の方が大変とはいえない。上積みする必要はない」とつれない。財務省と司法側との綱引きは続くが、「フリーターの日給にも届かないようでは厳しい」と法務省幹部の顔は曇る。

裁判員制度の成功はひとえに国民が制度を理解し、参加意欲を持てるかにかかっている。最高裁の昨春の調査で「参加したい・参加してもよい」と答えたのは約三割。「何とか過半数に」と法曹三者はPR作戦に汗をかく。

佐賀地検は昨年一年間に百十八回の説明会をこなした。数人の会合から地元の「遣唐使船レース」まで、検事や事務官が駆けつける。「裁判員制度」と書かれた法被姿で県内を飛び回る井内顕策検事正は「まるでどぶ板選挙。開き直ってやるしかない」と苦笑いする。

モンゴルの民族楽器「馬頭琴」と裁判員制度。異色の組み合わせのコンサートが今月十八日、横浜地検内で開かれ、約百五十人が集まった。神垣清水検事正は「『教えてやるから来い』という発想では人は集まらない。『来ていただく』ためのサービスは必要」と話す。



裁判員制度の広報活動として、横浜地検が主催したコンサート（18日、横浜市中区）

水戸地裁は茨城県と協力し、育児や介護をしている裁判員に一時預かり施設などを紹介する仕組みを整備した。幼子を抱える若い主婦層らに「安心して参加して」とアピールする狙いだ。

最高裁が初めて「漫画」に目覚めた。一月に完成した全編漫画の広報冊子は法服姿の裁判官がガイド役。漢字が多く、あか抜けないのは「らしい」ところだが、「お堅い最高裁が思い切った」の声も。日弁連も裁判員を通じ若者の成長を描いた漫画を公表する予定だ。

未来の裁判員、小中学生の〝教育〟も始まっている。

中学生に授業

「犯人と同じ服だよ」「白い長袖シャツだけで証拠になるの？」。昨年夏、東京都台東区立上野中学校の三年生の授業で「おばあさんから現金入りきんちゃく袋を奪った強盗傷害事件」を題材に、生徒が裁判員となって有罪・無罪を議論した。

授業後には「日本の問題を皆で考えられる」など肯定的な意見が目立ち、企画した高田孝雄教諭は「生徒なりに制度の意義と課題を理解した」と目を見張る。法務省は「若い世代は抵抗感がない」として教材作成を急いで進める。

最高裁と法務省は〇七年度予算で、広報啓発に計約十七億円、準備に伴う各地の裁判所の改修費用に約二百二十億円を計上した。膨大な予算と労力を投入するのは、裁判員制度が司法全体、さらには市民生活に劇的な変化をもたらす可能性があるからだ。

裁判の前段階である捜査は早くも見直しを迫られ、検事による取り調べの録音・録画の試行が始まった。市民参加で高い有罪率や量刑に変化が生じれば、治安への影響も広がるだろう。

慶応大法科大学院の平良木登規男教授は「三権で市民から最も遠かった司法を変える裁判員制度は、国民の社会参加の意識をも変える」と強調する。「国のかたち」の変革につながる芽をはらんでいる。

「国民のための司法を国民自らが実現し支えていくことが求められる」（司法制度改革審議会意見書）。国民に一定の役割を求めた司法制度改革に完成形はない。不断の見直しが必要だ。裁判員制度のスタートまで二年余り。試されるのは司法だけでなく、国民そのものでもある。（おわり）

取材班は金丸泰輔、中川竜、高田成四、並木康紀、石川淳一、池沢健一、坂詰英幸、江口博文、岩村高信で構成しました。